

世界の中心にある大森林地帯、エゼネアド・ラス——通称・魔境。  
あまりに広大かつ、多様すぎるモンスターの生息地となっているここは、冒険者  
にとって危険と稼ぎが裏表の場所となっている。

これはそんな魔境にある、ギルド兼診療所兼研究所のお話。

### （割愛）

それから二日後、この魔境に一つの冒険者パーティーが訪れた。  
全員がまだ若く、一番上でも三十を超えていないだろう。

先頭を進む剣士がカウンターに座るセエルへと近づき、とても丁寧に頭を下げた。  
「すみません、登録申請をお願いします」

そう言っ出てきた冒険者ギルドのカードには、全員Bランクとある。剣士、  
魔術師、アーチャー、神官という四人で、バランスは良さそうだった。

手元の魔道機器で照合しても、成績は良さそうだった。

「申請前に説明がございますので、こちらのテーブルへどうぞ」

セエルはそう促し、ガランとしているギルドの一角に彼等四人を招いた。

注意書きを添えた書類を四つ、それぞれの前に置く。それを読んだ面々の表情が

徐々に、険しいものとなっていく。

これも、見慣れた光景だ。

「私、冒険者ギルド魔境支部の支部長をしております、セエルと申します」

「ギルドマスター自らが！」

「まあ、職員は私だけですの」

「え……」

これに、アーチャーの青年が軽く引いた。まあ、こんな特殊なギルドは他にないだろう。

「ここは環境が特殊故、就ける者も、就きたい者もありませんからね」

「まあ、そう……ですね」

そう言いたくなるほど、この場所は危険なのだ。

「まず、書面にあるとおりです。ここはBランク以上の冒険者しか入れない特別危険区域。生息するモンスターは最低でB、上はSSSまでが普通の顔をして歩いています。つまり、Bランクの魔物など餌でしかないのです。その危険性を、熟知しておりますか？」

これに、まず全員が一度息を飲み、顔を見合わせる。

正直これで怖じ気づいているようでは、帰宅を推奨する。無理をする必要はないのだから。

だが、彼等に行く事を決めたようだ。

「分かっています」

「では、依頼についてです。この場所限定ですが、依頼失敗時の違約金は発生しません」

「それは、どうしてなのでしょう？」

魔道士が小さく手を上げて問う。これに、セエルは静かに答えた。

「違約金惜しさに無理をして全滅する冒険者が多すぎるからです」

これに、全員が息を飲んだのが分かった。

実際、多すぎる。セエルはここに住んで既に四百年程が過ぎているが、覚えていられない人数が死んでいるのだ。

「ちなみに、ここはギルド兼宿兼診療所でもあります。ここまで逃げられれば治療はできますので、無理をしないように」

「お一人でそんなに？」

神官が驚いた様子で眼を丸くする。だがこれも、必要事項だ。

「そもそも、挑戦する冒険者が他よりも少ないですからね。それに、冬場は閉じております。貴方達は今春初めての冒険者ですよ」

この森の冬は深いから、一般的に閉じている。春から秋までが、冒険者の稼ぎ時だ。

「あの、ギルマス」

「はい？」

「この書面にあるモンスタアの生態注意なんだが……本当なのか？」

剣士が恐る恐る問いかけてくる。これに、セエルは内心ニヤリとしながら答えた。

「本当です。この森は生存、繁殖が大変厳しく、モンスタア同士でも縄張り争いや餌の取り合いが起こっています。ですので多くの種が、種族や性別も関係なく托卵、生殖行為を行い、孕ませる程に種が強いのです」

そう、これがこの森の独自進化であり、面白い生体だ。

モンスタアも大抵は、男女で番い、子孫を残す。

だがここは環境が過酷で、同種がよいタイミングで巡り会う事や、巡り会ったとして条件が揃うかが未知数。

故に、彼等は他種や性別を超えた繁殖を行う。

卵生のものは他生物の体に卵を植え付け、保温器のように利用する。

獣系も繁殖に適した個体を複数囲う癖があり、捕まえて気に入られれば交尾対象。しかも多くが男でも複数回種を入れる事で相手の体の方が変化するという厄介な性質を持つ。

しかも春は一部の種が発情の季節を迎えており、より危険性は高い。

まあ、捕まえて食い殺すのではなく繁殖させるので、殺されるリスクは下がるの

だが。

「冗談じゃ、ないんだ……」

「ええ。こちらでの処置の多くが、モンスターに孕まされた冒険者の処置です。一部は本当に危険なので、早めの処置を必要とします」

「そんなん、間に合わなかったら！」

「モンスターの卵が体内で大量孵化し、腹を破って絶命……なんてこともあります」  
「っ！」

これに、四人は本当に真っ青な顔をした。どうやら理性はまともらしい。

「これらの危険性と、自分達の技量を考慮してから書類にサインを。冒険者は自己判断の職業ですが、危険についての説明はこちらの義務です」

「……時間を頂いても？」

「勿論。二階が宿泊部屋となっていますので、好きな部屋を。食事はこちらに頼むのであればお代を頂きますが、自分達で調理する場合は無料です」

そう説明して席を立つと、彼等は不安そうに顔を見合わせ、揃って二階へと上がっていった。

（割愛）

夜になって、ライオは少し不機嫌になっていた。

「しかたないよ、ライオ」

「ネアは悔しくないのかよ」

「十分だよ」

そう苦笑している。ジグとしてもこれ以上は伸ばす気はなかった。

その時、ふと奥の茂みからガサツという音がして、瞬時に全員が体勢を立て直し警戒した。

「……いるか？」

「分らない」

一瞬の沈黙……そして再びガサツという音がした瞬間、ミデルが魔法を放った。『フゴオオオ！』という声は間違いなくオークだ。続いて、ズドオという重い音。

それはこれまで聞いたものよりも大きな音だった。

「今のって、大物じゃね！」

「回収しに行こうか」

これで三体なら、悪くないだろう。

回収にはジグとミデルが向かった。暗い森の中を少し行くと、そこには三メートルを超えるオークが倒れていて、絶命している。

「大物だ」

「買い取り、少し期待できるかもな」

そんな事を言って回収し、野営に戻ってきた……それはもう、地獄の始まりだった。

「助け！ ジグ うううう！」

「ライオ！」

悲痛な声を上げたライオを捕らえていたのは三メートルを超える巨体のオークだ。そいつは小柄なライオを脇に抱えている。

咄嗟にネアを探した。彼が帰還アイテムを持っているからだ。

だが……ジグもミデルも血の気が引けた。

「ひう！ あっ、ああ！」

若いオークがネアを押さえつけながら腰を振っている。服は既にボロ布同然となり、意味をなさない。泣きながら抵抗しているけれど、掴んでいるオークは丸太みたいな腕をしている。

その傍らに、丁寧に首から外された帰還アイテムが落ちていた。

ジグは咄嗟にそれに向かって走った。起動できれば帰れる。そのためなら腕の本くらいは覚悟だった。

アイテムに手が届く。そう思った瞬間……ジグの体を後ろから捕まえる腕があった。

おおよそ、オークの体色ではない。鈍い赤色をした肌は筋肉が大きく盛り上がり、血管を浮かせている。

恐ろしい気配に心臓が音を立て、息が浅くなる。そうして振り向いたジグはそこで、気を失いそうになった。

ジグを捕まえたオークは確かに豚耳ではあったが、より人間に近い形をしている。大きく発達した下顎の犬歯は牙で、猪のように見える。額には角が二本。体色は赤く、全体的に筋肉質。大きさはむしろ二メートル台に思えるが、全身が鎧だ。

「オーク……ジェネラル……」

ダメだ、終わった。殺される……

震えが走る。股間がジワリと濡れていく。

そんなジグをジッと見つめたオークジェネラルが、脇に抱えるようにしてジグを奥地へと連れていく。

ミデルも、ライオも、既に気絶しているネアも……

その絶望を、ジグは全て見ていた。